強者の戦略

【海禁策にはちゃんと触れましたか？】

朝晩は少し涼しくなりましたが、まだまだ残暑がきびしいですね。こんにちは。むくんでいるのかふくれているのかわかりませんが、夏に痩せてまた戻りました(笑)。まあ、受験生のみなさんにはまったく関係ありませんけどね。ともかく季節の変わり目は体調管理を万全に。

さて、毎回している告知ですが、９月１６日からは後期の「スパルタン」が始まります。ぜひ有効に使ってください。いよいよ二次対策も本格化してきました。夏の模試の結果もそろそろ返ってくるでしょうから、今後「二次力」向上をどうするか、対策をしっかり練ってくださいね。

では問題の解説、というかワンポイントのアドバイスです。チャレンジしてみてどうでしたか。東大や阪大のようなネットワークを重視した出題の多い大学では、貿易に関する知識は必須ですね。また京大のように、中国の一つの地域やテーマで複数の王朝にまたがる出題がある大学でも、しっかりと確認しておきたい知識です。

《解説…というよりワンポイントアドバイス》

問題は「市舶司が設置されていた時代(唐から明にかけて)、中国の海上交易に対する政策は、どのように推移したか。当時の海上交易の状況と併せて２４０以内で述べよ。」といういたってシンプルなものでした。実は少し前の阪大の改題です。簡単に整理しましょう。

今回は「市舶司が設置されていた時代」となっていますが、市舶司は唐からはじまります。王朝ごとにみていきましょう。

唐といえば、東アジアに大帝国をつくり「東アジア文化圏」の中心となりました。唐の文化というと、貴族文化・国際色豊か、というキーワードですね。だから様々な国の人々が唐を訪れているのがわかります。８世紀にはアラブ人がすでに訪れています。

唐から宋に変わると、外圧が激しくなり文化は国粋的になります。一方で商業の発達があって、庶民文化が発達します。唐よりもさらに宋の方が商業が発達するんですね。だから対外貿易も盛んになっている。泉州や明州などはテキストによくでてきますね。泉州は後の元の時代にマルコ＝ポーロが「ザイトン」の名でヨーロッパに紹介していることは有名です。

元については運河の整備などが記憶にあると思いますが、実はそれだけでは十分でなく、海運も発達していることも忘れてはいけません。

明以降の注目は「海禁」です。しかし海禁策をとっても朝貢は許されていました。後に明の後半は西欧の大航海時代になりますが、このころスペインやポルトガルなどがアジアに積極的に訪れます。1567年に海禁を緩和(廃止ではない)すると、西洋人が積極的に訪れ、スペインがもってくるメキシコ銀などが中国に多く流入することになります。今回の解答例には書いていませんが、銀の流通が盛んになることで、明の税制が変化します。何だったか覚えていますか？

問題の範囲ではないですが、清代の海禁も確認しておきたいところです。18世紀中頃に広州一港のみの貿易になったというだけでなく、17世紀、1661年の遷界令も海禁策の一種と考えていいし、1684年には海禁が緩和されています。清の税制は銀で納めることになっていましたが、何だったか覚えているでしょうか。

教科書などを見ながら、もう一度チャレンジしてみてください。

《解答例》

唐代にアラブ人が訪れて広州や揚州などの港市が栄え、市舶司が設置され、以後宋代も交易は盛んで、明州や泉州などが南海貿易で栄えイスラーム商人が来航した。元代も海上交易は盛んで、江南から山東半島を回り大都に至る海運も発達した。その後倭寇が出現、明の海禁策で倭寇は衰えた。明は海禁で中国人の渡航を許さず、交易は朝貢中心で、促進のために鄭和に遠征を行わせた。しかし倭寇が盛んになり、16世紀からポルトガル・スペインの来航が盛んになると、1567年に海禁を緩め、ポルトガルにマカオ居留権を認めた。（２４０字）